

上代日本仏教における戒律・私考

一、はしがき

二、仏教の伝来と我が国の受容態勢

三、仏教の興隆と度の紊乱

四、僧尼の統制

五、鑑真的来朝と戒

六、附・鑑真略伝

服部清道

一 はしがき

帰化僧鑑真和尚の名がこのところにわかに脚光をあびるようになった。井上靖はさきに小説『天平の薨』において、鑑真がわが国の入唐僧栄叡、普照の屈請を容れて、伝戒師として渡日を決意した後、一二年におよぶ苦難を超えて渡航するまでの経過、さらに天平勝宝五（七五三）年来日以後、天平宝字七（七六三）年示寂するまでの全貌を明らかにしたことに発し、昭和三八年は鑑真の一二〇〇年遠忌相当の歳ということで、中国では北京と揚州とで記念集會が催されたが、『中国画報』は同年一二月号に両市における「鑑真和尚一千二百年祭」の概要を報道した。北京は中国の首都であり、また江蘇省揚州市（広陵江陽県）は鑑真の生地であるためである。

これよりさき、奈良唐招提寺では鑑真彫像の中国出開扉を企画し、昭和五五（一九八〇）年春渡海させることに成功した。それについては、先年鄧小平中国副主席が来日の際に、唐招提寺側が、同寺の開山像をして故国の土を踏ましめさせたい旨を申し出たという土壌づくりがあり、延いてはこのことを実現させることによって日中友好関係の高揚に利そうとする政治的なもくろみがあったとしても、それとは別に、私は史家としての立場から、このことの機会に、古代日本仏教乃至仏教界の実相をあらためてかえりみたいと思うのである。即ち仏教伝来このかた既に二〇〇年に垂んとし、凡天下に国分二寺の建立を見て国家仏教まさにその極に達したかに見える天平の世において、あらためて伝戒師の召請を要請した当時の仏教界を直視したい。

二 仏教の伝来と我が国の受容態勢

そもそも日本への仏教の伝来は、当時大陸の先進国の仏教伝来とは異色的なものであった。後日聖徳太子は憲法十七条の第二に「篤敬三宝、三宝者仏法像也」といわれたが、仏法は四生の終帰であり、萬化の極宗であるとしても、その理法を説き、仏法の貴さを知らしめるための主役は「僧」である。

いま試みに、当時、大陸先進国の仏教伝来史をたずねるに、大月氏国においては、仏滅後六〇〇年、カシカ王がカシミラに五〇〇比丘を結集して第四回結集をなし、中国においては後漢の世、明帝が永平（五八〜七五）年中に蔡愔、秦景を大月氏国に遣わして仏法をもとめしめ、それによって永平一〇（六七）年天竺僧攝摩騰、竺法蘭の二僧を伴って帰朝したことをいえ、また朝鮮仏教は、初め南北朝時代、東晋簡文帝の治世、咸安二（三七二）年、北朝前秦王苻堅が僧順道をして仏像、經卷を高句麗に伝え、翌年僧阿道が伝道し、また南鮮百済国へは枕流王元（三八四）年に東晋の僧摩羅難陀によって伝えられたといわれる。この伝来の年時、また僧名については史実的には問題があるとしても、その伝来の手続きについて、両国ともに僧によって伝えられたことには信憑性がある。ただし、これら大陸諸国はいずれも地を接し、ことに中国と朝鮮半島とは国人の私的な接触、交流は、古来の慣例として容易に行なわれたことを想うときに、仏教東漸についての年時は、これを日本流にいうならば、ともに公伝に関する所伝を語るものであって、私伝としてはもっと以前に在ったことも想像されるのである。

日本仏教の伝来については従来、諸説がある。これひとつには、何人も古典を意のままに駆使できる学問自由のたまものともいえる。まず最初に挙げられるのは『日本書紀』欽明天皇一三年壬申（五五二）の条に

冬十月、百濟聖明王聖名遣聖王西部姫氏達率怒唎斯致契等、献三釈迦仏金銅像一軀、幡蓋若干、經論若干卷。

との記事である、この記事のなかで「西部」は百濟の行政区画名であり、「達率」は百濟国の官位の第二階であることから、この百濟から最初に仏教をもたらしたと伝えられる怒唎斯致契は百濟国官使であったことに注意したい。私はさきに、日本への仏教伝来の手続を「異色の」と評したのはこの点であった。即ち三宝のうち「僧」を伴わない、外交儀礼上の政治的意味合いをもった仏と法、二宝の献上であったのである。日本書紀は続いて別表の流通礼拝功德の讃辭を載せているが、その「是法於諸法中」以下四二字は『金光明最勝王經如来寿量品』中の語句を殆どそのまま採ったものであることが、夙く飯田武郷により『日本書紀通釋』において後世の偽作であると指摘されている。

この日本書紀の仏教伝来記に対して異説がある。その第一は『上宮聖徳法王帝説』で「志癸島天皇御世戊午年十月十二日、百濟国主明王始奉レ度三佛像經教并僧等」を載せ、ここでは仏法僧三宝の伝来を伝えている。しかし伝来時の志癸島天皇（欽明）御世戊午（五三八）年は、日本書紀の年紀では宣化天皇の三年に相当して、欽明天皇ではなく、且つ欽明天皇二三（五五二）年とは、その間一四年のへだたりがある、

また最澄は、南都の護命が上表の中に「志貴島御宇天皇歲次戊午百濟王奉レ渡三来仏法」と述べたに対して、『顯戒論』の中に「天皇（欽明）即位元年寅申御宇正經三十二歲」。謹案三歲次曆二都無三戊午年。元興緣起取三戊午二己乖三實録二と反論しているが、最澄の主張では、護命がいう欽明天皇御宇戊午歲仏教伝来は、欽明天皇治世三二年間には「戊午歲」は無く、これは『元興緣起』にも伝えるところであるけれども『實録』（日本書紀敷）

に乖るものである、というのである。この欽明天皇戊午歳仏教伝來說は、さきの『上宮聖徳法王帝説』に見られたが、元興寺にも同様の伝承が存したことを知るのである。『元興縁起』は『元興寺伽藍縁起流記資財帳』であろうが、この縁起は、天平一九（七四七）年に諸大寺に命じて縁起流記資財帳を上らせた時の資料となったものと推定されているが、詳しくはその縁起の初めに「斯歸島宮治天下」国案春岐廣庭天皇御世、蘇我大臣稻目宿禰仕奉時、治天下十七年、歳次戊午十二月度来、百済国聖明王時、太子像并灌佛之器一具及説佛記書卷一筐」と、仏教伝来の年時を欽明天皇の七年戊午としている。これを要するに、奈良では古寺や僧族の間に、仏教伝来は風化せずに古伝説として個々に伝えていたのであった。因に、元興寺縁起では、いまだ僧宝の渡来は見られない。

以上の諸書所伝に依る仏教伝来年時は、それぞれ戊午歳、壬申歳の「ずれ」はあっても、それを志癸島天皇御宇とすることにおいては一致している。後に凝然が『三国佛法傳通縁起』に『大安寺審祥大徳記』を引いて、「檜隈蘆入野宮御宇宣化天皇即位三年歳次戊午年十二月十二日從百済国佛法傳來」と、戊午の干支に拠り、これを日本書紀の紀年にあわせて、以て宣化天皇御宇四年に組み替えた異例は別框として。

さらに、これら諸伝所説とは、少しく傾向を異にした異説、『扶桑略記』が引く延暦寺僧『禪岑記』の伝えがある。これは同書が日吉山薬恒法師が「法華驗記云」として引用されるもので、それには「第廿七代繼體天皇即位十六年壬寅、大唐漢人案部村立司馬達止、此年春二月入朝、即結草堂於大和国高市郡坂田原、安置本尊、帰依禮拜。挙世皆云、是大唐神之。出縁起隠者見此文」とあって、仏法伝来を説くときに、常に引用されるものである。扶桑略記は一二世紀末、鎌倉時代初頭ころ比叡山僧皇圓の編述にかかるものであるが、『法華驗記』の編者薬恒は朱雀天皇（九四〇～九四六）御世の人といわれ、また延暦寺僧禪岑は薬恒とほぼ同時代天暦六（九五二）年ころを中心に生存したと推定されているので、結局、平安時代中期にまで伝承されてきた仏法伝来

説ということであつて、日本書紀その他の古典が伝える欽明天皇治世伝来時を遡る時代に、既に仏法の渡来があつたことを伝えているという点に視点が集中されるほかは、そのままを正確な史実として受容し難いものである。而して禅岑記説の本源は『坂田寺流記』に発しているのである。そもそも、司馬達止が仏像を安置、礼拝したに発する坂田寺の地は、かつて蘇我氏の根拠地であり、それ以前は雄略朝（四五七～四七九）に来航亡命した半島帰化工人が定住させられた桃原、真神原のうち、桃原の近傍であつて、後の飛鳥文化発祥の地でもあつた。と、して見れば、司馬達止に限らず、欽明朝以前において、朝鮮半島から、また半島經由し来つた亡命漢人が、故国において信奉していた仏教を、そのまま帰化国日本に持ち込んで私に信奉していた者があつたろうことは事実として認めなければならぬ。何故ならば、仏法東漸以来、この時まで既に、中国においては四世紀余り、朝鮮半島にあつても二世紀ほどの歳月を経過しあり、その間には雲崗の石窟寺院などのような彫刻芸術を成立させているのであるから、仏教信仰そのものも社会の各層に広く深く普及浸透しておつたことが考えられるので、四世紀ころ以来ようやく顕著になつてきた朝鮮半島からの渡来、亡命者のなかには、漢族系、韓人を問わず、仏教を自己の信仰としていた者も混在しておつたことが想像される。さきに述べたように、法王帝説などが伝えるわが国仏教伝来の年時についての異説は、そのような事実の投影と思考され、かの司馬達等の伝承などもその一例である。そこで或る史家は、それら諸説を一応、措置するための便法として、日本書紀が伝える欽明天皇一三年説をもつて仏教公伝の年時と看做し、その他の諸伝を仏法の私伝としている。然しこの場合に、この公伝と私伝とは、表面的には同じく仏法の伝来という表現でとらえられがちであるが、伝来そのことの内容に相異があつたことを看のがしてはならない。即ち、公伝は、仏法を日本社会に弘通し、もつて衆生済度に資せしめんとする百濟王の志向に基づくものであつたと理解され、たとえ日本書紀の記事、表現に後世の追作攙入と

いう不信な部分があったとしても「此法能生無量無邊福德果報、乃至成辨無上菩提」と仏法の真値を説き、「奉_レ伝_二帝国_一、流_二通畿内_一果_二佛所記我法東流_一」という日本書紀編述者のうけとり様は、必ずしも編者の恣意であったとは考えられない。それに対して私伝にあっては、自己個人の信仰、即ち自利的なものであって、公伝における利他的なものを目堵としてなかったのである。

司馬達等および鞍作鳥にいたるこの一族が、当時、仏教弘通に致した貢献について、日本書紀は、推古天皇の勅というかたちをもって「朕欲_レ興_二隆内典_一、方將_レ建_二仏刹_一、肇求_二舍利_一。時汝祖父司馬達等便献_二舍利_一。又於_レ国無_二僧尼_一。於是汝父多須那為_二橘豊日天皇_一出家、恭_二敬佛法_一。又汝姨嶋女、初出家為_二諸尼導者_一、以修_二行釋教_一。今朕為_レ造_二丈六佛_一、以求_二好仏像_一。汝之所_レ献佛本則合_二朕心_一」とたたえ、もって「大仁位」を賜った所以としている。斯くして司馬達等が渡来帰化して後、この一族がこぞって、仏法伝来早々期において、その信仰普及に尽した功績は大きいものがあつたろうが、といって、さきの推古天皇勅とおりのものを事実として認めるにはいささか抵抗がある。その当時、多量に來航帰化したものの中には、仏教信仰の上では司馬達等級の信者が幾人か在了たであろう。しかしその多くは当人一代限りの信仰で終焉したか、或いはその子孫は社会の注目に浴することなしに没入してしまった。ところが、達等の一族は、たまたま当時中央に権勢をもった蘇我氏に見出だされて、その女鳥は蘇我馬子のために度されて善信尼と称し、禪藏尼、惠善尼とともに、さきに馬子が佐伯連から請うけた仏像を礼拝奉仕し（日本書紀 卷第一九）、また止利は仏師として法興寺金堂の丈六仏に関與（日本書紀 卷二、二、年勅）したなどにより、遡源的に一族の消息が正史にのこることになったものである。後日仏師止利が大仁位に叙されたについては、止利の仏師としての貢献度とともに、以上のような一族連綿として仏教興隆につくした功績が背景となっていることはいうまでもない。それより先、鞍部多須奈（達等の子）は用明天皇の御病平癒を祈るため

出家修道し、また丈六の仏像を造り、寺を造立することを奏上し（日本書紀卷第二一）、崇峻天皇三（五九〇）年、遂に徳齊法師となった。大和国南洲の坂田寺は鞍部多須奈が造営にかかるものであるが（日本書紀卷第二一）、これはさきの発願の成就である。

ここで論点を仏教伝来の当初にもどそう。日本仏教の伝来については、伝来の年時、またその内容についても異説がある。伝来の年時については、大略、前述のとおりである。伝来の内容については、元興寺伽藍縁起が「度佛像經教并僧等」と伝えているほかは、日本書紀（卷第一九）が「釋迦佛金銅像一軀、幡蓋若干、經論若干卷」と記しているのを初め「太子像并灌佛之器一具及說佛起壺」（太子伝古今目錄抄所引建興寺縁起）「佛像經教」（天平宝字五年最勝王聊簡略集序）、「佛像經教」（佛法伝来記）、「金銅釋迦像一體、並經論、幡蓋等」（扶桑略記第三）「釋迦銅像、經論幡蓋若干品」（元亨釈書卷二〇資治表一）「金銅釋迦佛像并幡蓋等及經論若干卷」（三國弘法伝通縁記卷中）等とあって、概ね日本書紀の伝えを踏襲している。これによれば、日本への仏教の伝来は、僧を伴なわない「佛法」二宝の、外交儀礼としてのものであり、また渡来帰化人の例を考えてみても、それは個人の生活の裡にふくまれた信仰としてのものであって、自利的なものであった。僧を伴わない仏教の伝来は、折角伝えられた經論も読誦聴聞さすべき手段なく、經論を通じて仏法を理解すべくもなく、したがって正しく仏法を理解し、入信の道は無かったということになる。伝えられる如く仏法伝来をめぐって蘇我・物部両氏の争いがあり、史家はそれを崇佛・排佛の論議とも解しているが、その当時の日本の実状においては、そうした高度な論議はまだ生ずべくもなく、その内容、実態を知らざるままの勢力抗争にすぎなかったとみられる。またそのような抗争を惹き起こしたについては、仏教の真意を説くべき僧侶が居らなかったことが原因の一つとして挙げられなければならない。

しかもその後しばらくの間、仏教に関する情報は日本書紀の面にはあらわれない。敏達天皇六年（五七七）に

いたって、冬十一月、百済国王はわが遣使大別王等に付えて経論若干卷並びに律師・禪師・比丘尼・咒禁師・造仏工・造寺工の六人を献上しきたった（日本書紀卷第二〇）。欽明天皇一三年以来二四年、司馬達等が坂田原の茅舎に仏像を帰依礼拝したことが伝えられてから五五年後のことである。ここにいたって日本仏教は、わが邦記録の上では初めて僧宝を得て三宝物の体制が整えられたことになる。しかし仏教信仰社会の実状はその半世紀の間、開店休業に等しいような沈滞した情態ではなかったろう。国際的には、あたかもこの期間は、朝鮮半島との関係は緊密化し、さらに中国との直接交渉の路が開かれ、それにとまって半島から、また中国本土から来航、帰化する者が多くなっていたから、それに伴って、渡来者個々の信仰としての仏教の持ち込みも、その例が多くなっていたことも考慮しておかなければならない。

続いて敏達天皇一三（五八四）年には鹿深臣百濟より来たり、弥勒石像一軀をもたらした。時に佐伯連なる者も仏像一軀を伝え有っていたが、蘇我馬子はその仏像二軀を請うけ、これを奉安礼拝するために司馬達等、池邊直氷田を遣わして四方に修行者を索めさせた。而して播磨国に住む還俗僧高麗恵便を得て、礼拝の師とした。司馬達等の女島および漢人夜菩が女豊女、錦織壺の女石が同時に度され、わが邦最初の尼僧がうまれたのはこの時である。さきに敏達天皇六年百済王から献られた律師・禪師・比丘尼は、その他の造仏工・造寺工らとともに、その後難波の大別王の寺に安置させられるまでの間の消息は不明である。またさきに引用した元興寺伽藍縁起が伝えるように、欽明天皇一三年仏教がもたらされた際に、仏像・経教と併せて僧が贈られてあったならば、それから三〇余年後のこの時にあたって、蘇我馬子があらためて四方に法師を索めなくとも、仏像礼拝等に就いての対処は、蘇我氏の権力をもってすれば、中央において為し得たことであつたろう。また蘇我馬子は、この年、司馬達等から仏舍利を贈られ、石川の宅に仏殿を修治して奉安したとも云われるが、仏法の信、不信を分つ

蘇我、物部・中臣兩派の抗争はこの後しばらくの間いよいよ激しさを加えることになるが、仏法伝来にもなう大陸からの文物の伝来及び僧侶の渡来は一段と頻繁となったが、就中崇峻天皇治世には幾つかの注目すべき事象がおこっている。まず天皇即位元（五八八）年には百済国から僧惠摠・令斤・惠寔等が使して仏舍利を献られ、別に百済国は恩率首信以下を遣わして調を献り、併に仏舍利、僧聆照律師・令威・惠衆・惠宿・道嚴・令開等のほか寺工・鑪盤博士・瓦博士・画工など仏寺の造営や本尊像の造頭に必要な専門技工を献られた。時に馬子は百済の僧等を請して「受戒の法」を問い、善信尼らをもって百済国使恩率首信らに付けてかの国に遣わし、学問を学ばしめた。学問尼善信等は三年春帰還したが、察するところ善信尼が学びとったものは「戒」および「授戒」についてであつたろう。この歳大伴狹手彦達の子善徳・大伴狛夫人新羅媛善妙・百済媛妙光・漢人善聰・善通・妙徳・法定照・善智聰・善智恵・善光等が同時得度している。これよりさき用明天皇一（五八七）年には鞍部多須奈は、天皇の奉為に出家して道を脩わんことを奏上したことは前述したところである。

かくして、推古天皇紀を直後にして仏法興隆のための陣容は三宝ともに一応、整ったかに見られる。しかし仏法公伝が伝えられてから僅かに四〇年の歳月を閲したに過ぎない。その間、わが邦人は漢文字の読解にとぼしく、僧宝に人材を得ず、百済僧の奉獻帰化があつても、彼等の業績は窺うに足る史料を缺き、崇峻紀におけるわが邦得道僧尼にしても、その多くは自誓受戒にも近い簡易な僧宝造りであつたようである。したがって当時、仏法信奉者はもとよりのこと、僧尼自体が仏教を如何様に理解していたかは疑問である。

仏教は本来、悟道・解脱の宗教といわれる。即ち、人間の多くは諸法（万象）の実相を知らず、無明の煩惱のため、架空の物に執着する、およそ人生の苦悩はそこに由来するのであるから、すべからく修業をかさね、それによって得た真知によってのみ執着の迷を払拭することが出来る。これが開悟の道であり、覚者―仏陀となる道

である。このような悟道論理に立脚する仏教について、はじめて日本的な解釈を示したのは聖徳太子である。太子は憲法十七条の第二に「三宝は仏法僧なり、則ち四生の終帰、萬化の極宗なり、何れの世、何れの人か、此の法を貴ばざる。人はなほだ悪しきもの鮮し。能く教れば之に従う。其れ三宝に帰せずんば、何を以てか狂れるを直さん」と述べたが、即ち「人鮮^ニ尤^ニ惡^ニ」とは人間の性善、菩提心の具有を認め、最終句の「何以直^ニ枉^ニ」とは、無明煩惱の世界から真知悟入への道を示したものと理解される。またかの法隆寺釈迦像の造像銘には「誓願敬造^ニ釋迦佛像^ニ、以^ニ此願力^ニ、七生四恩六道衆生、俱成^ニ正覺^ニ」とあって、仏道信仰の本筋に則って顕造されたものであることがわかる。

しかし古代日本における仏法についての理解、また仏教信仰の実状は、現存史料による限りでは、誤った理解、ことに信仰の面では現世利益的な志向が先行していたやに看取られるのである。かの鞍部多須奈は、日本における仏教の教化が生んだ最初の出家僧であるが、その出家の動機は用明天皇の御病平癒を祈願したためであり、また南瀨の坂田寺の造立并に本尊丈六仏像の造顕も同じ発願に基づくものであった。

この後、仏教の普及と信仰の高まりに呼応するようになかたちで、多須奈のような発願によって造寺、造像される例が次第に多くなった。その顕著な例を挙げるならば、河内の野中寺の弥勒菩薩像は天智天皇五（六六六）年、天皇の御病平癒のため同朋一一八人が祈願をこめて造顕し（同像台座 榎縁銘）、奈良薬師寺は天武天皇八（六八〇）年皇后御不豫のとき祈禱のために建立がはじめられ（薬師寺東 塔擦銘）、次いで持統天皇一一（六九七）年六月天皇病のため公卿百寮所願の仏像を造りはじめ（日本書記 卷第三〇）、これがいま薬師寺金堂の本尊であるといわれるが、その多くは天皇また皇后の不豫に祈願されている。また天皇の不豫に当たり、それとは別な作善が修業された例も多く、天武天皇八（六八〇）年天皇御病にあたり一百僧を度し、同一〇年八月日高皇女（元正 天皇）御病には大官大寺に一四〇人の出

家が度され、朱雀元（六八六）年八月重ねて天皇不豫に際しては、その朔日に八〇僧、翌日僧尼あわせて百人を入度させるなど、この種の例は多い。また当時の国内事情を象徴するように、仏事をもって降雨を祈願し、また霖雨による災禍を除かんとすることも天武朝ころから修されている。

仏教の信仰に基づく造寺造像その他の作善、また經典の読誦、三宝祈願、僧尼の入度などによる現世利益を目堵した仏教信仰の志向は、およそ以上述べたような傾向をもって歳月を追うてますます顕著になったが、その総括的顕現とも評さるべきものが国分寺の造立であろう。就中、国分僧寺は金光明四天王護国之寺の称の如く、金光明最勝王經、妙法蓮華經各一〇部を写し、別に聖武天皇宸写の金光明最勝王經一部を塔に安置し、常置二〇僧をもって該經を読誦せしめ、その功德を廻して順天神祇共相和順・恒将福慶・永護国家を祈願するものであった。順天神祇共相和順・恒将福慶の思想は日本古来の神祇奉祠の基本であり、また仏法による永護国家の祈願はさきに聖徳太子が難波の地に四天王寺を創建した趣志に包含されていたのである。いふなれば、国分寺の造立に期待される願望は、仏教伝来以後久しい間正しい化益に浴することもなく、仏教に対する正しい理解を得られなままに、当時社会環境の裡から己が自々に感得した仏教信仰を、敏達天皇治世の頃からようやく僧宝の化益教導に浴し、併せてわが邦僧侶および入信者によって醸成された、謂わゆる奈良仏教にうわ乗せし、併せてわが邦古来の神祇信仰の思想を同乗させたかたちで顕現したものと、私は理解している。

三 仏教興隆と度の案乱

仏教に仏・法・僧の三宝が不可欠の要素とされていたと同様に、古来、真俗を問わず、仏道にたずさわるものにとって持戒は不可欠であった。釈迦入滅後、仏弟子の結集において、先ず論議されたのは制戒についてであった。第一結集は結集七ヶ月に律と法とを決し、第二回結集では結集八ヶ月、比丘衆のなかに戒律について意見を生じ、そのため上座部（保守派）と大衆部（進歩派）に分裂したという歴史にかんがみても、戒が如何に大事に考えられていたかがわかる。

戒は律と連称して戒律とも呼称されて、仏教生活の基準であり、身・口・意の三業によつて起こる防非止惡の規定である。このことを『大薩遮尼乾子所説經』^{（一）}には「持戒は最第一なり。戒は清涼池の如く、諸の善華を生ず。亦猛熾火の如し、能く諸の惡草を焼く。戒善持の行者は鳥の虛空を飛ぶが如し。生死の諸趣惡道中に墮せんことを懼れず、惡道の大毒龍、無明の諸羅刹、淨戒を持つ者を見ては恭敬して害心を捨つ。一切諸如来、安穩に涅槃に住し、諸の惡趣の道を斷つは皆持戒に由るが故なり」と説いている。そのためには人に応じて制戒を定め、先ず在家の人（優婆塞、優婆夷）の受持すべきものとして不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒の五種を制し、沙弥、沙弥尼は、さきの五戒の不邪淫を不淫となし、その上に香油塗身、歌舞觀聽、高廣大床、非時食、捉金銀寶を重ねて十戒を課し、比丘・比丘尼に対しては、具足戒を受持させることとしている。しかしその二百五十戒は比丘の戒であつて、比丘尼はさらに二百五十戒を加え、あわせて五百戒を課したのである。

ここで日本の仏教伝来当初の実情を省ると、戒は伝えられなかった。私伝、公伝ともに僧による伝来でなかったからである。私伝は渡来歸化者の信仰として、公伝は外交儀礼の献上物としてであつたことは、すでに前節に述べたとおりである。

而して、わが文献の上に僧宝が姿を見せたのは敏達天皇六（五七七）年であった。即ち百済王が還使大別王に付けて律師、禪師、比丘尼各一人を献上してきたのである。この律師、禪師がどのような閲歴をもった者であるかはわからないが、一国の元首から外交使節に付された献上という手続に鑑みて、然るべき人物であつたろうことが想像できる。しかもそれと同時に経論若干巻および造仏工・造寺工が献上されたということは、或いは日本の要請にしたがつたものであつたかも知れない。それから一一年後の崇峻天皇元（五八八）年には、同じく百済国から僧惠摠らが遣わされて仏舍利とともに僧聆照律師・令威・惠衆・惠宿・道巖・令開等が献上されたが、この際にも寺工・鑪盤博士・瓦博士・画工など、造寺・顕像に必要な技術者が多数あつたことは、さきに献上された人々とあわせて、謂わゆる飛鳥時代仏教興隆の基盤は、概ね整えられつつあつたと考えられる。ことに蘇我馬子は、来朝の僧惠摠等に受戒の法をたづね、それによって善信尼等を百済国に遣わして学問させることとした。その「学問」（ものな）
（らひ）とは主として戒法についてであつたろう。このことは、わが仏教史上に戒学が抬頭した初めであり、また仏教研究のための海外派遣の嚆矢でもある。因に、この善信尼は司馬達の女島で、さきに敏達天皇一三（五八四）年、蘇我馬子によって、弥勒石像を奉安礼拝するため、還俗僧高麗惠便について入度をうけ、その時一一歳であつたから、この度の派遣時には一五歳に達していた。これには禅蔵尼等他の二人が同伴したであろうが、善信尼等が何を研修し、何時帰国したかは不明である。

この四年後に推古天皇の即位を迎え、厩戸皇子が摂政として内外の政務にたずさわることとなり、その一二年には憲法十七条を撰して政治革新の大綱を顕示されたが、ことに第二条「篤敬三寶、三寶者佛法僧也。則四生之終歸、萬化之極宗」云々の文言は、その当時においてもうけとめかたは様々であつたろうが、教法信奉者、また仏教の弘通には有功な背景となつたことは事実である。しかも、この時には既に、仏教の信仰は上向きに展開し

つつあり、併せて聖徳太子自らの仏典研究、造寺顕像等現実的な仏教信仰推進のための努力は大臣蘇我馬子の崇仏志向に支持され、且つ高麗僧惠慈（推古天皇三年）・百濟僧慧聰（推古天皇三年）・同觀勒（推古天皇一〇年）等学僧の来朝、帰化等があるが、結果的には謂わゆる飛鳥文化―仏教文化の盛時を迎えることになるのであるが、それにともなつて、時代便乗者の出現による弊害もおこっていたようである。例えば、推古天皇三一（六二四）年における寺四六所、僧八一六人、尼五六九人という激増は、決して平常な増えではなく、ことに僧尼の数においては、それより四〇年前、敏達天皇一三（五八四）年当時、蘇我馬子は仏道修行者を四方にもとめて、ようやく播磨国に還俗僧一人を得て、それに付けて善信尼等三尼を入道させたという実状を考えると、急速な増数に驚くのである。而もその当時は、造寺、顕像による表現的な華やかさがあつても、仏道の推進力たる肝要な僧侶の育成には充分な人物・組織はいまだ整わず、したがつて僧また尼と称するものも、その多くは私度または優婆塞、優婆夷にも近く、且つ五戒すらも知らず、また持さない類いの者であつたという、文字とおりの濫造であつたことが考えられる。しかも尚、それを規制すべき制度も整つて居らなかつたようであつたから、自然、僧尼による犯罪、乱行が顕現しつゝあつたことであらう。

推古天皇三二（六二四）年四月、はたしてその一端が暴露された、即ち一僧が斧をもつて祖父を殴つたのである。それにより天皇は大臣に詔して、僧尼戒法を厳しく、諸寺の僧尼を聚めて推え問わしめ、事実ならば重く罪せしむるよう命じたが、その詔には「夫出家者頓帰三寶具懷戒法。何無懺忌輒犯惡逆」と、出家して三宝に帰依した者が戒法を懷した行為に対して、一面いぶかつたのである。時にたまたま百濟僧勸勒が来朝していたので、彼は上表してつぎのように述べている。

夫れ仏法は、西国より漢に至りて三百歳を経たり。乃ち伝はりて百濟国に至り、僅に一百年になりぬ。然るに

我が王、日本天皇の賢哲ましますことを聞き、仏像及び内典を貢上りしより、未だ百歳にだも満たず。故れ今の時に当りて、僧尼未だ法律に習はざるを以て、輒ち惡逆を犯せり。是を以て諸僧尼惶れ懼ちて所如を知らず、仰ぎ願はくば、其の惡逆の者を除きて、以外の僧尼をば悉に赦して、勿罪したまひそ。是れ大なる功德ならむ（日本書紀卷第二）。
（原漢文訳岩波本）

觀勒のこの上表は、當時のわが仏教界の實情を遺憾なく描き出している。この一件は僧尼に対する嚴重な規制が要求され、僧尼自らは森嚴な反省と持戒がうながされた筈であるが、寺院の造立と入道僧尼の数は年々増加して、持統天皇四（六九〇）年七月には京の七寺に安居の沙門三二六三人、別の三寺に安居沙門三一九人におよび、同六年には寺の數五四五箇寺（扶桑略記）と伝えられる。この僧尼數のなかには歸化族も相當數混入していたであろう。このようになっては、政府は僧尼対策を積極的に構じなければならなかった。

そのため、先ず人數減らしのための苦策として、東國への集團移住が實施された。未開發地方の開拓と文化の移植を企図したのであらう。即ち天武天皇一三（六八五）年五月、歸化し來たつた百濟の僧尼および俗人、男女併せて二三人を武藏國に置き（日本書紀卷第二九）、持統天皇元（六八七）年四月には太宰府から投化の新羅の僧尼および百姓男女二三人を送り來たり、これを武藏國に居らしめ（日本書紀卷第三〇）たが、その後奈良時代、天平宝字二（七五八）年八月にも歸化の新羅僧三二人、尼二人および男一九人、女二二人を武藏國の閑地に移し、ここにはじめて新羅郡を置くこととなった。これら歸化僧尼の東國移植は、天平期における國分寺の造立と相俟って、当該地域への仏教弘通、延いては仏教文化の伝播にも寄与するところがあつたらう。いま群馬県に謂わゆる上毛三碑があり、そのうち多野郡小神谷の「山ノ上碑」は文武天皇九辛巳（六八一）年の造立とされるが、その碑文に「僧長利」の名があり、且つ長利は放光寺の僧であつた。また多野郡「金井沢の碑」は聖武天皇神龜三丙寅（七二六）年の

造立で、その銘文によると、群馬郡下賛郷高田里の三家の家刀自池田君、目頼刀自以下一族が知識に結んで、祖先および父母の菩提のためにこの石文を造立したとある。この二例はともに、僧尼の減員対策として閑地に移住させた結果から生じた仏教文化が地方に伝播されたことを実証するものでもある。

政府はまた仏教政策として金光明経など經典の読誦を行ない、仏事法会を盛んにするなどをはかった。これ一には仏教の弘通を目的とし、併せて修法を通して仏道の修業に供し、仏法を体得せしめ、かたがた以て教界の淨化にも資せしめようとの意図があったろう。しかし一度すべり出した惰性は容易にとどまらなかつた。

ここにおいて政府は天武天皇のころから經濟上の統制、風俗の取締り、官制上からの規制などをもつてそれに臨んだ。殊に僧官の制は、はじめ天武天皇元年、大官大寺に限って小僧都・律師・僧正を置いたが、同一二（六八四）年三月僧綱の制度を定め、僧正・僧都・律師を置き、勅して僧尼を統領せしめ、次いで文武天皇二（六九八）年一月大僧都を置いた。さらに同天皇の大宝元（七〇二）年大宝令が制定され、続いてそれが修正されて、元正天皇の養老二（七一八）年養老令一〇巻が制定されたが、その中の第二に僧尼令が収録されてある。まこと、大宝令は今に伝わらず、一般に大宝令と呼称されるのは、実はこの養老令である。僧尼令は総て二七条から成り僧尼の犯罪・療病・還俗・名籍・徒党擾乱・道場建設・侍者・飲食・音楽博戯・服制・房内留宿・僧尼の接触・山居禪行・僧綱任命・苦使刑・僧名の貸与・偽称・訴訟・蓄財・敬礼・死亡届・齋会の布施・焚傷致命など詳細に僧尼の行住座臥に関し、物心両面にわたり細に規定しており、ことに僧尼の自還俗、俗尼相互の接触についてはそれぞれ数条にかかわり規制しているのを見ると、このことが当時の仏教界を混乱し、僧尼の社会を紊乱させる禍根とも考えられていたことがわかる。自意による還俗者の多くは私度僧であつたろう。しかし僧尼令においては私度そのことについて触れるところがないが、僧綱による制度上において得度に関する統制がきびしく行われ

ていたようであるから、結果的には私度の取締りということになったと考えられる。しかし天平宝字三（七五九）年六月二日、元興寺教玄僧都の「竊に惟るに、私度の僧は深く仏教に乖き、更に亡命を作す。伏して請ふらくは、天下に住するなく、国内に彼此共に検して勤めて本邑に還らしむべし」との奏状に任せて私度の僧を禁断しているのは、このころにいたって私度僧の弊害が際立ってきたことをものがたっているようである。

かくして、さきに僧尼を統領する機関として僧綱が制度化され、続いて僧尼令が定められるにおよび、僧尼に対する規制は整備されたが、しかし僧尼令では、令の本質上から、それはあくまでも法制的規制細則であって、僧尼たるものの最も大事であるべき持戒については直接に触れることなく、僧尼の常に律すべき具体的な項領、即ち令二七条全体が持戒であると理解されるのである。

四 僧尼の統制

天武天皇はさきに、一二（六八四）年三月、僧綱の制を定め、僧正・僧都・律師を置き、僧尼を統領させることとしたが、奈良時代に入るにおよび、養老六（七二二）年七月一〇日、太政官は「僧綱は智徳具足して、真俗の統梁なり、理義該通して、戒業精勤なり。緇素之を以て推譲り、素衆是に由て帰仰す。然も居所一に非ず、法務備はらざるを以て、難事荐に臻て、終に令条に違へり」との旨を奏上して許され、それにより居所が一所に定められることとなり、薬師寺をもって常の住居として定められた。（続日本紀卷九） 他方、僧尼社会の綱紀は、この期にいたって、以前にも増して紊乱して、持戒は無に等しき僧尼も多く出で、或いは在京の僧尼によってほしいまま

に剃髪されて、街衢の間に乞食し、或いは村邑のなかに聚宿を常とするという異状ぶりであった。養老六年七月、太政官はこの状を具さに述べて禁断されるよう奏上した。その状に云く、

化を垂れ教を設ることは、章程に資りて以て方に通ず。俗を導き人を訓めることは、彝典に違て即ち妨ぐ。近ごろ在京の僧尼、浅識輕智を以て、罪福の因果を巧説し、戒律を練せずして、都裏の衆庶を詐はり誘む。内聖教を黷し、外皇猷を虧けり。遂に人の妻子をして剃髪刻膚せしめ、動もすれば仏法と称して、輒く室家を離れしむ。綱紀を懲ること無く、親夫を顧みず、或は経を負ひ鉢を捧じて、食を街衢の間に乞ひ。或は偽て邪説を誦して、村邑の中に寄落し、聚宿を常と為し、妖訛群を成す。初は脩道に似て、終には奸乱を挾めり。永く其の弊を言ふに、特に須く禁断すべし」（統日本紀卷九、原漢文）

と。以て当時の弊風を推察することができる。私はさきに推古天皇三二年において、僧八一六人、尼五六九人と云う数字をいぶかったが、この太政官奏言を聞くにおよんで、その実情を知ることができた。而もその濫行をすすめる僧侶は、自らは「不練戒律」「浅識輕智」の徒であり、彼等によって濫りに剃髪刻膚せしめられた妻また子であつてみれば、彼等の生活社会には戒の心は片鱗だに認められないだろう。

これに依り政府は京畿および諸国々別に判官一人を遣わしてそのことを監当し、厳しく捉搦を加え、若しこの色有れば、所由の官司は即ち見任を解き、その僧尼は、詐つて聖道を称して百姓を妖惑すると同じく、律に依つて罪を科し、その犯す者は即ち百杖に決し、勤して郷族に還し、主人・隣保および坊令・里長は並に杖八十に決し、官当蔭贖を得ざること（類聚三代格卷三）と定められた。

僧侶の統制については、これよりはやく、推古天皇の治世に入度の制が施かれている。即ち日本書紀（卷第二三）同天皇三二（六二四）年九月の条に「校寺及僧尼、具録其寺所造之縁、亦僧尼入道之縁、及度之年月日也」と

見える。入度の実は、さらにそれよりもやく敏達天皇二三(五八四)年島女善信尼等の入道があったが、この期にいたって入道僧侶数が増加し、また戒律に悖る者も出で来たことにより、その状況を悉知統領するためこのような措置がとられたのであった。

そもそも「度」は、生死罪濁の苦海から涅槃常樂の境に到着することで、Paramita(波羅密多)の訳語であるが、『華嚴經』に「以波羅密於生死流中、不依此岸、不着彼岸、不住中流、而度衆生無有休息」とある。「度衆生」から取り、また波羅密多とは「生死の此岸から煩惱の中流を渡り、涅槃の彼岸に到る」意義であるとの説明も、またこの經文の直訳である。而して、この「度」は菩薩必修の六度とされ、これに布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六種があり、六波羅密、また六度行と總稱される。そのうち「持戒」は原語 Sīra Pāramita (「羅波羅密」) の漢語訳「持戒波羅密」の略語で、身業(Kāya, 殺生・偷盜・邪淫)、口業(Vācā, 妄語・綺語・兩舌・惡口)、意業(Cetas, 貪欲・瞋恚・邪見)の諸惡を調伏防止して、三業悉く如法、如律なることを稱し、この状態をもって到彼岸、また涅槃常樂の境と稱される所以である。虎関師鍊は『元亨釈書』度受志^(卷第 二七)に「夫度有二焉。内外也。背以戒為標難染於形、戒律於心内度也。初二也。無難染而受戒。外度也。後二也。曰、古之言度者、前二而已」と、度について述べているが、持戒波羅密は、内度において始めて可なり。ここにおいて、師たるものは弟子の器を見定めることが肝要となる。養老六年七月太政官奏言に知られる「不練戒律、詐誘都裏之衆庶、内黷聖教、外虧皇猷、遂令三人之妻子剃髮刻腐、動稱仏法、輒離室家」などの在京僧尼は、まさに外度に属する類と稱すべく、而もその類は年々増加しつつあり、且つそのなかには、出家に託して公課を免れんとする者もあった。このことは養老元(七一七)年五月元正天皇の詔のなかに「率土百姓、浮浪四方、規避課役、遂仕王臣、或望資人、或求得度」^(統日本 紀卷七)とあるに依つても知るところで

あり、また「令」に「僧尼取年十六已下不輸庸調者」と定め、また「凡僧聽近親鄉里取信心童子供侍、年至十七各還本色」としているのは、いずれも公課忌避のための出家を妨止するための年令制限であった。

養老四（四二〇）年正月四日、はじめて僧尼に公驗が授けられた、（続日本紀卷八）即ち度牒である。次いで同年八月

三日にもそのことがあったが、このときは、治部省の奏によって、公驗を授くる僧尼、多く濫吹あるによって、唯学業を成せる者一五人に授け、自余はこれを停めることとした（続日本紀卷八）。

公驗即ち度牒は、出家受戒した僧尼に、その証として授けたものである。この制度の発祥については、中国において五世紀、北魏孝文帝（四七二―四九九）の時、大州・小州の別に依って度者の数を定め、私度を禁じ、無籍の僧尼は罷めて還俗させたということが伝えられ、また『僧史略』には「度牒自南北朝有之、見高僧傳」、限局必有憑申、度牒即今祠部牒也」などと伝えているが、この度牒が制度として設けられたのは唐玄宗の天宝六（七四七）年で、わが天平一九年に相当する。

わが邦における僧尼の統制は推古天皇時代に発している。これについては、既に述べたが、その動機は、日本書紀（卷十二）に依る限りでは、推古天皇三二年四月、或る僧が斧を執って祖父を殴ったことに発している。依って諸の僧尼を集め、惡逆僧及び諸の僧尼を並に罪せんとしたが、百濟僧觀勒の上表の意を聽されて、惡逆僧に限り罪することとした。觀勒の上表によると、当時のわが邦は、仏像および内典が伝えられてから未だ百歲に滿たず、「故に今時に當て、以て僧尼は未だ法の律に習はず、輒ち惡逆を犯す」というのである。これに依り、天皇は「夫道人尚犯法、何以誨俗人」との詔に基ずき、僧正・僧都を任じて僧尼を檢校せしめることとし、觀勒を僧正に、鞍部徳積を僧都に、阿曇連を法頭に任じ、その九月、寺及び僧尼を按て其の寺の「所造之縁」、および「僧尼入道之縁及度之年月日」を具さに記録せしめられた。その後、天武天皇時代における僧綱制、さらに大

宝令中僧尼令二十七条の制定があつて、僧尼に対する統制措置は、一応、整つたのであつたが、その後においても度制の弛緩による弊風は容易に制止できなかったようである。即ち聖武天皇の治世、神龜元（七二四）年一月治部省の奏に

京及び諸国僧尼の名籍を勘検するに、或は入道の元由披陳明かならず、惣は名は綱帳に存すれども、還て官籍に落ち、或は形貌麤を誌せども、既に相当らざるもの、愁て一千一百廿二人、格式に准量して公驗を給ふべけれども、処分を知らず、伏して天裁を聴かん、と。（続日本紀）

当時すでに諸寺に上座・寺主・都維那の三綱があり、中央に僧正・僧都・律師の僧綱があつて、僧務を統べ、また治部省には玄蕃寮があつて全国の仏寺および僧尼の名籍を掌り、名籍は六年毎に三通つくつて僧尼の出家の年月、夏げろ藤および徳行を記し、一通は国にとどめ、他の二通は太政官に送り、中務省及び治部省が各々それを管するという制度であつたが、当時いまだ調製が十分でなかったことが知られる。また當時は入道僧尼が自ら俗に還る例も多かったようである。これ一つには得度にあたり、「師及弟子、當互審其器」（馬鳴菩薩集）という点に先觀を缺くものがあつたとみられる。それらをふまえて、太政官は天平六（七三四）年十一月奏して「仏教の流転は必ず僧尼に在り、人の才行を度りて簡める所司を實にせん、比來の出家は學業を審にせず、多く囑請に由ること、甚だ法意に乖けり。自今以後道俗を論せず、挙する所の度人は唯法華經一部或は最勝王經一部を闡誦し、兼て礼仏を解し淨行三年以上ならん者を取つて得度せしめば、學問彌長じ囑請自ら休まん」（続日本紀）と、嚴しい得度の資格をもとめている。

五 鑑真の来朝と戒

わが邦は仏教受容以来、仏教の普及と正しい信仰をもとめて、併せてその任に堪え得る智識をそだてあげるために、異状とも云うべき努力をたゆみなく続け、その積み上げを或いは制度とし、法制化した。しかしその努力は仏教を護持し、弘通せしめるための行政的な措置であつた。また奈良天平時代までのわが邦の史料では、仏教僧尼が名僧智識として、また三界の導師として渴仰さるべき「格」である「戒」並に伝戒の作法修法について知るために頼れる史料はほとんど無い。東大寺沙門擬念が『律宗瓊鑑章』（巻第八）に「仏法漸伝。而戒法未治」と述べているとおり、初め「法」は伝えられたが「戒」は伝わらなかった。そのため、善信尼等三尼あつても、「諸縁不合。不能行如法受戒之事」であつて、いまだ得度の法を知らず、また百済国に渡り、十戒六法および具足戒を受けたとあつても、その真相は知られず、たとえそれが事実であつたとしても、善信尼になるための得度受戒の域を出なかつたであろう。その後敏達天皇六（五七八）年律師・禪師、また崇峻天皇元（五八八）年聆照法師以下の来住があつたが、「他国来朝之僧、皆彼国比丘僧超但於此国不能授具」とあるのが真相であつたろう。そのため僧の多くは占察・瑜伽等の教に依り、或いは従他受によって三聚戒を持し、或いは好相を得て自誓受を行ずるという状態であり、そのため文武天皇は道光律師を中国に遣わしめた。これわが邦戒学の第一伝である。また行基は徳光法師に随つて具足戒を受けたというが、真相はわからない。そのころ天平八（七三六）年唐僧道璿が来朝した。道璿は唐都洛陽の大福光寺に住した時、たまたま天平五年入唐した普照、栄叡の誘めに応じて

同七年、遣唐使節多治比広成等一行の船に便乗して来日し、南都大安寺西唐院に住し、禪律を善くしたため、朝廷は請うて戒師となし、伝戒に当たられた。これわが邦における伝戒の第一である。これに就いて師鍊は「于時本朝乏戒学。朝廷請為戒師不_レ倦授受。嘗曰。所以成_レ聖必由_レ持戒。常誦梵網、其音清亮如_レ出金石。聞者感動」と評しているが、いやしくも聖と成るものは持戒を第一とし、戒の授受に専心つとめたようである。これにより、当時興福寺において法相学をもつて知られた行表もまた彼について重ねて戒法を受けたと云う。然して、道璿が伝えた戒は、梵網戒であつたようである。

鑑真は道璿渡来後十九年、孝謙天皇天平勝宝六（七五四）年正月来朝した。わが邦律宗は鑑真をもつて第三伝とするが、わが邦の伝戒は、鑑真によつてはじめて登壇授戒の戒法が具わり、しかもその授法はこの後ながくわが邦授戒の規範となつたのであるから、実質的には、鑑真が戒学伝来の第一祖と考えてよい。

鑑真が渡来については幾多の困難があつたと伝えられる。鑑真の来朝もまた、さきに道璿を渡来させた入唐僧栄叡・普照の勧めによるのであつた。時に鑑真は揚州大明寺にあつた。鑑真の律学は道宣の嫡流と云われる。当時あだかも盛唐期にあり、戒律盛んに行われたが、道宣の名が最もあらわれた。『戒壇図経』（唐乾封二年選）を撰したのは道宣である。鑑真の師道岸はその嗣である。鑑真は神龍元（七〇五）年道岸にしたがつて菩薩戒を受け、ついで景龍二（七〇八）年、實際寺において恒景について登壇具足戒を受け、諸大徳を歴訪して三蔵を究め、戒律を講じて帰郷した。それより先、道岸入寂して義威が嗣いでいたが、開元二十一年（天平五年七三三）義威また寂し、鑑真がその後を嗣いだのであつた。時に四六歳。道俗帰服し、律を講ずること七〇遍、人を度すること四万有余におよんだと伝えられる。時に普照、栄叡が鑑真を大明寺に謁ねたのは天宝元年（天平十四年七四二）であつた。かくして、鑑真は日本来航の意を決した後、幾度か渡航をはかったが成らず、天宝二十二年（天平勝宝五年七五三）、わが遣

唐使節の還船に便乗して、第六回目にして、その企画を達したのである。この間に鑑真は明を失い、栄叡は没していた。同年十二月二〇日、薩摩の秋妻屋浦に着し、翌年正月、入唐副使大伴古麻呂に従って入京した。天平勝宝六（七五四）年で、鑑真は齡六七に達し、随従の弟子に揚州白塔寺僧法進以下曇靜・思託・義靜・法載等一四人及び智首尼等三人、優婆塞潘仙童その他都て二十四人（註二）、所將の經典は四分律一部六〇卷・法勵の四分疏五本各一〇卷・光統の四分疏一二〇紙・鏡中記二本・智首の菩薩戒疏五卷・靈溪の菩薩戒疏二卷・定賓の戒疏二本卷一卷・道宣の含注戒本一卷および疏・行事鈔五本・羯磨疏等二本・懷素の戒本疏四卷等を含む戒律関係の經疏が大部分をしめるが、就中、智首の菩薩戒疏五卷・靈溪の菩薩戒疏二卷および南山道宣編『关中創開戒壇図經』一卷が将来されていることに注意されるほか、天台の止觀法門玄義及び文句各一〇卷、四教儀一二卷、行法華懺法一卷・小止觀一卷など天台法門關係書が比較的多いことにも注意したい。しかもこれら所將の經疏は、数度の渡航失敗を繰り返している間にも失われることなく、最後まで保持されたものであった。

二月一日、鑑真等難波に到るや、唐僧崇道等出でて迎え、三日河内国において藤原仲麻呂の使者、道璿の弟子善談および僧志忠等三〇余人に迎えられて、四日京に入り、勅して安宿王の迎慰を受け東大寺に入った。五日道璿・婆羅門僧正はじめ官人多数の慰問あり、のち勅使吉備真備をもって詔が伝えられた。「大徳和尚遠く滄波を渉り此の国に投る。誠に朕が意に副ふ。喜慰諭ること無し。朕此の東大寺を造て十余年を経、戒壇を立て、戒律を伝受せんと欲す。此の心有りしより日夜忘れず。今諸の大徳遠く来りて戒を伝ふること、寔に朕が心に契へり。今より以後、受戒伝律一へに大和尚に任す」と。また天皇は僧都良辨に勅して、諸の臨壇の大徳の名を録して禁内に進めしめ、日を経ずして、勅して、鑑真に傳燈大法師位を授けた。（過海大師）而して、同年四月、初めて盧遮那殿（東大寺）前に戒壇を立て、天皇初めて登壇して菩薩戒を受け、次ぎに皇后・皇太子また壇に登りて戒を受け

られ、尋いて沙弥四四〇余人に戒を授け、また旧大僧靈祐・賢璟等八〇余僧が旧戒を捨てて受戒した。次いで同年五月、宣旨によって戒壇は大仏殿に西に戒壇院を作り、天皇受戒壇の土を移し、同七年九月造り終った。これが現東大寺の戒壇である。さらに天平宝字元（七五七）年正月五日、勅して四月一五日より五月二日までの間、国毎に梵網經を講ぜしめた。（続日本紀 卷第二〇）布薩の法がここに始まったのであるが、各国分両寺に勤修する僧尼に対する持戒意識の覚醒をはかったのであった。

しかし、鑑真の伝戒の事実については、諸書の伝えるところ必ずしも一致しない。例えば聖武天皇の受戒について、東征伝は「天皇初登壇受菩薩戒、次皇后皇太子亦登壇受戒」と伝えるが、続日本紀は本紀に記なく、その九年後、天平宝字七年五月六日、「大和上鑑真物化」の条に、鑑真が略伝を述べたなかに「聖武皇帝師之受戒」と伝え、皇后・皇太子の受戒には触れていない。また『延暦僧録』は「聖武皇帝菩薩伝」に「其年四月、勝宝感神聖武皇帝於盧舍那佛前天皇菩薩請鑑真和尚登壇受菩薩戒、皇太后皇太子並隨天皇受菩薩戒」と伝えるが、これは東征伝のままを受け容れたものであり、『元亨釈書』は「上皇大悦受菩薩戒、皇帝皇太后太子」と表現を変えているが、本筋は東征伝とかわりなく、その他の諸書も大同小異である。

およそ鑑真伝について記載する諸書を読むに、最も古い選述は『唐大和上東征伝』である。この書は鑑真の弟子思託の撰述であり、『延暦僧録』もまた思託の撰述である。而して延暦僧録は延暦七（七八八）年に成ったが、彼はそのなかに、宝龜一〇（七七九）年二月、淡海真人元開（言船）に請うて編述したと述べている『和上東行傳荃』が、現在伝えられる「唐大和上東征伝」であろう。また『続日本紀』は延暦一六（七九七）年二月、菅野真道等が撰修奏上したものである。鑑真伝について最も古いといわれるこの三書の編述年代が、まさしく右のとおりとするならば『続日本紀』の編者が、鑑真伝を記するに思託の所伝を参考にしたと思われるにかかわらず、

聖武天皇の受戒に就いては、当該年時に記載せずに僅かに和上傳のなかに「聖武皇帝之受戒」と数語を記しているにとどまり、皇后皇太子については記されていない。また戒壇に就いては、鑑真の伝戒は、最初から登壇受戒であり、天皇の受戒を認めているのであるから、当然、初めの戒壇の構築、またその後の措置に関しても、一言触れて然るべき大事であったと考えるのであるが、それから三年後、天平宝字元年正月五日の条に「勅始_レ自_二来四月十五日_一至_二五月二日_一。毎_レ国令_レ講_二梵網經_一」と、そのしめくりと云うべき一事を掲げているにとどまる。

天平勝宝六年、鑑真に依る東大寺盧遮那仏前における登壇授戒、ついで東大寺戒壇の建設は、続いて筑紫観世音寺に西国戒壇を、下野薬師寺に東国戒壇の設置をうながし、中国並に辺国の三戒壇の名において、しばらくわが邦の仏教界を左右するまでの存在となったのである。

鑑真に依って伝えられた戒は、まさしく大乘戒であり、盆網戒であった。東征伝に依れば、旧大僧靈祐等八〇余人の僧は「旧戒を捨てて大和尚所授の戒を受_レけたというが、これまで靈祐等が持っていた戒は小乗四分戒であったためであって、これに由って、これまでにわが邦僧尼が受持した戒は、総じて小乗戒であったということがわかる。

また鑑真がわが邦に伝えた戒壇は、道宣の『関中創開戒壇図経』に依る形式であった。鑑真はこの戒壇図経を伝来したのである。鑑真は道宣嫡流の伝戒師であることをさきに述べて置いたが、『戒壇図経』は道宣が晚年撰述に関り、道宣はその序に「乃以乾封二年（六六七）於京都之南、創弘斯法」と述べ、また「余以_二乾封二年二月八日_一創築_二戒壇_一。男嶽沙門尋華遠集者二十余人、至_二於夏初_一衆俗更集載受_二具戒_一」と述べている如く、道宣自ら戒壇を築き、授戒を行うための必要から撰述されたものであって、謂わば終南山清宮郷浄業寺戒壇図説である。終南山は陝西省西安府城の南五十華里に位置し、古来、山中に寺を構える者多く、唐朝の頃は至相寺、悟真寺、

草堂寺などの名が知られ、浄土門の善導、華嚴宗の宗密もこの山中に隠棲したことあり、道宣が唱導した戒律を南山律と称するのは其の謂である。道宣には別に『中天竺舍衛国祇洹寺図経』がある。

律制は十師受を原則とする。即ち三師（伝戒師、威儀師、教授師）、七証である。受具の制に「請_レ現前十師_一自_二四羯磨_一、請_二清浄持律大德十人_一、為_二三師七證_一。若闕_二一人_一不得_レ戒」とあり、十師の資格また嚴重であったが、諸縁その数を得ない場合を予想して、宝唱は『比丘尼傳』中に「律師十僧得_レ授_二具戒_一、辺地五人亦得_レ授_二之_一」と為し、幾許を以て辺地となすかについては「千里之外、山海難隔者是也」として、千里の外なる辺地においてこの略式を認めたのであった。わが邦の東国及び西国戒壇をもつて辺国戒壇の制「五師授戒」を認めたのはこれに基づく便法であつて、鑑真は、またこの『比丘尼傳』も同時に将来していた。

中国においては、早くから十師受法が行われて歴史的な裏付けがあつたが、わが邦においては不健全な自誓受が長きにわたつて行われ、そのために起こる種々な弊害があつた。鑑真はそれを排除のための伝戒師としての来朝であつたから、鑑真は自らもとめたその使命をはたすためにも、敢えて嚴重な受法としこの十師受を採つたようである。しかし、このことは、後に唐招提寺に退棲せしむるにいたつた一因ともなつたのである。

鑑真は天平宝字三（七五九）年八月、私に唐律招提の寺を構えてこれに退棲した（東征_伝）。自ら伝戒師の使命をにない、始終六度の渡航をはかり、一二年の苦難を経て、天平勝宝六（七五四）年来朝して僅かに六年目である。それについて思託は『延暦僧録』に「後ち真和上、唐寺に移住し、人に謗讟せらる。思託、和上の行記を述べ、兼て淡海真人之開に請て和上の東行傳筌を述へしむ。則ち先徳を掲げて後昆に流芳せんとす」と述べていることに注意したい。鑑真の来朝は、たしかにわが伝戒史上に一時機を画したものであり、後世から顧れば大きな存在

意義を為したかも知れないが、当時のわが邦仏教界においては、今日考えられるように大きな存在とは観られなかったようである。また仮令え大きな存在であったとするならば、それだけに法相興福寺側にとっては好ましからざる存在であった。また「自今以後、授戒伝律一任_二和上_一」という程に、天皇の親任が篤かったとすれば、南都諸宗にとっては嫌悪すべき存在であつたろう。

淳仁天皇は天平宝字二（七五八）年八月詔書に「政事躁煩。不_二敢勞_一老。宜_レ停_二僧綱之任_一。集_二諸寺僧尼_一、欲_レ学_二戒律_一者、皆属令_レ習」（（続日本紀卷廿））と仰せられたが、憶えば、鑑真の南都仏教界における地位は、この頃を最頂点としてひたむきに下降していったようである。『続日本紀』（（卷二））鑑真伝は「俄以_二綱務煩雜_一、改授_二大和上之号_一。施以_二備前国水田一百町_一。又施_二新田部親王之舊宅_一以為_二戒院_一」と述べ、『戒律伝来記』もまたその意をうけて「詔_二天下僧尼_一皆学_二戒学_一」と伝えて、鑑真が唐招提寺に退棲は、盲い且つ老齢なることをいたわり、僧綱の躁煩なる任を停め、専ら教律伝戒に当らせ、併せて、来集する衆僧の供養料として備前国水田一町を施入したと理解されるが、内実はもっと厳しいものがあつたようである。而して鑑真は天平宝字七（七六三）年五月六日、戒院に端座して恬然と遷化した。時に年七〇有七、退棲して僅かに五年であつたから、諸堂いまだ備わらなかつたと想われる。しかし鑑真の遺志は法嗣如宝、豊安兩代の間に概ね達成された。

六 附・鑑真略伝

鑑真の生涯を伝える書としては、『過渉大師東征傳』一卷と『延暦僧録』の「鑑真伝」がある。両書ともに延

曆初年、思託の撰述である。

鑑真は中国揚州江陽県（南京の下流）の人。唐中宗嗣聖五年（持統天皇元年）に生まれた。一四歳で出家をもとめ、一八の時、智満禪師に就いて出家して沙弥となり、大雲寺に配住された。神龍元（七〇五）年道岸律師に謁し、菩薩戒を受けた。当時戒律盛んに行われ、南山道宣の名が最もあらわれたが、道岸はその嗣である。鑑真は、次いで景龍元（七〇七）年長安にいたり、同二年三月、實際寺に登壇して、弘景律師について具足戒を受け、東西二京を巡遊して三歳を究学し、のち淮南に帰って戒律を教授した。それより先き、道岸が遷化して義威が嗣いたが、開元二（七三四）年（天平五年）義威入寂し、鑑真その跡をつぎ、律を講ずること七〇遍、人を度すること四万余におよび、淮南の地に大いに戒律をひろめ、天宝元（七四二）年揚州大明寺に在った。時に入唐僧栄叡、普照の頂礼を受け、その懇請を容れて、伝律のため日本への渡航を決意した。栄叡らが屈請の辞に云う「唐国諸寺の三歳大徳皆戒律を以て入道の正門と為す。若し戒を持たざる者あらば僧中につらねず。是に於てまさに本国伝戒の人無きことを知る」と。鑑真はここをもって門弟を説き、衆を諭し、並に伝戒宣律に要する法具、經疏を整え、初め天宝二（七四三）年、従者二人とともに発足したが、海賊のために海路塞がり、また誣告の僧のために州長に止められ、船は没収されて、第一回の渡航計画は失敗に終った。続いて同年一二月、天宝三年、同七年と、併せて五回渡航をはかったが、その都度、或いは海上遭難し、或いは反対者のために阻止されるなどの厄に遭い、その間、弟子をうしない、天宝九年には栄叡が死没するなどがあり、鑑真また眼を患って明を失った。そして天宝一二年（天平勝宝五年）、弟子二十四人とともに、わが遣唐使の船に便乗することを得、第六回にして、ようやく所期の願を達することが出来たのである。時に天平勝宝（七五三）五年一二月二〇日、薩摩国秋妻屋浦に着岸し、翌六年正月太宰府に到り、二月四日、入唐副使大伴古麻呂に従って奈良京に入った。時に鑑真は齡六七に達していた。直ちに

勅して東大寺に安置された。ここで、先きに来日した道璿および婆羅門僧正の慰問をうけた。四月勅により、初めて東大寺盧遮那仏前に戒壇を設け、聖武天皇初めて登壇して菩薩戒を受けられ、以下登壇受戒するもの四四〇余人、靈祐等八〇余人の僧も旧戒を捨てて受戒した。翌五月、戒壇院建立の宣旨が下され、同七年九月、東大寺大仏殿西に戒壇院の建設の工を竣った。この際に、天皇受戒壇上の土は新戒壇に移されていたのである。鑑真はその後僧綱に列せられ、戒学の弘宣に尽すところが多かったが、天平宝字二（七五八）年、政事躁煩のため、老齢を配慮されて僧綱を退き、専ら諸寺の僧尼を集めて戒学を学ばしめるためをもって、新田部親王の旧宅を賜い、新に戒院を創めて住したが、天平宝字七（七六三）年五月六日、同院で遷化した。時に齡七七。戒院はいま唐招提寺である。

註一 僧尼令第七 凡貳拾漆條（辻善之助著「日本仏教史」上世篇による）

1 凡僧尼上觀_二玄象_一、假說_二灾祥_一、語及_二國家_一、妖惑百姓、并習_二讀兵書_一、殺_レ人奸盜、及詐稱_レ得_二聖道_一、竝依法律、付_二官司_一科_レ罪。

2 凡僧尼卜_二相吉凶_一、及小道巫術療_レ病者、皆還俗、其依_二佛法_一持_レ咒救_レ疾、不_レ在_二禁限_一。

3 凡僧尼自還俗者、三綱錄_二其實屬_一、京經_二僧綱_一、自餘經_二國司_一、竝申_レ省除附、若三綱及師主隱而不_レ申卅日以上、五十日苦使、六十日以上者、百日苦使。

4 凡僧尼將_二三寶物_一、餉_二遺官人_一、若合_二構朋黨_一、擾亂徒衆、及罵_二辱三綱_一、陵_二突長宿_一者、百日苦使、若集論_レ事、辭狀正直、以理陳諫者、不_レ在_二此例_一。

5 凡僧尼非_レ在_二寺院_一、別立_二道場_一、聚_レ衆教化、并妄說_二罪福_一、及毆_二擊長宿_一者、皆還俗、國郡官司知不_二禁止_一者、依_レ律科_レ罪、其有_二乞食者_一、三綱連署經_二國郡司_一、勘_二知精進練行_一、判許、京内仍經_二玄蕃_一知、竝須_二平以前捧_レ鉢告

乞、不得因此更乞餘物。

6 凡僧聽近親鄉里取信心童子供侍、年至十七、各還本色、其尼取婦女情願者、

7 凡僧尼飲酒食、害服五辛者、卅日苦使、若為疾病藥分所須、三綱給其日限、若飲酒醉亂、及與人鬪打者各還俗。

8 凡僧尼有事項須論、不緣所司、輒上表啓、并擾亂官家、妄相囑請者、五十日苦使、再犯者、百日苦使、若有官司及僧綱斷決不平、理有屈滯、須申論者、不在此例。

9 凡僧尼作音樂及博戲者、百日苦使、碁琴不在制限。

10 凡僧尼聽著木蘭·青·碧·皂·黃及壞色等衣、餘色及綾羅錦綺並不復服用、違者各十日苦使、輒著俗衣者、百日苦使。

11 凡寺僧房停婦女、尼房停男夫、經二宿以上、其所由人、十日苦使、五日以上卅日苦使、十日以上百日苦使、三綱知而聽者、同所由人罪。

12 凡僧不得輒入尼寺、尼不得輒入僧寺、其有覲省師主、及死病看問、齋戒、功德、聽學上者聽。

13 凡僧尼有禪行修道、意樂寂靜、不交於俗、欲求山居服餌者、三綱連署、在京者僧綱經玄蕃、在外者三綱經國郡、勘實竝錄申官、判下山居所隸國郡、每知在山、不得別向他處。

14 凡任僧綱、謂律師以上、必須用德行能伏徒衆、道俗欽仰、綱維法務者、所舉徒衆、皆連署牒官、若有阿黨朋扇、浪舉無德者、百日苦使、一任以後不得輒換、若有過罰及老病不任者、即依上法簡換。

15 凡僧尼有犯苦使者、修營功德、料理佛殿、及灑掃等使、須有工程、若三綱顏面不使者、即准所縱日、罰苦使、其有事故、須聽許者、竝須審其事情、知實然後依請、如有意故無狀輒許者、輒許之人、與妄請人同罪。

- 16 凡僧尼詐為方便、移名他者、還俗、依律科罪、其所由人與同罪。
- 17 凡僧尼有私事訴訟、來詣官司者、權依俗形參事、其佐官以上三綱、為衆事若功德、須詣官司者、竝設床席。
- 18 凡僧尼不得私畜園宅財物、及輿販出息。
- 19 凡僧尼於道路遇三位以上者隱、五位以上斂馬相揖而過、若步者隱。
- 20 凡僧尼等身死、三綱月別經國司々々每年附朝集使申官、其京内僧綱季別經玄蕃、亦年終申官。
- 21 凡僧尼有犯、准格律、合徒年以上者還俗、許以告牒當徒一年以上、若有餘罪、自依律科斷、如犯二百杖以下、每杖十一、令苦使十日、若罪不至還俗、及雖應還俗、未判訖、竝散禁、如苦使條制外復犯罪不至還俗者、令三綱依佛法量事科罰、其還俗并被罰之人、不得告本寺三綱及衆事、若謀大逆謀叛及妖言惑衆者、不在此例。
- 22 凡有私度及冒名相代、并已判還俗、仍被法服者、依律科斷、師主三綱及同房人知情者、各還俗、雖非同房、知情容止、經一宿以上、皆百日苦使、即僧尼知情居止浮逃人、經一宿以上者、亦百日苦使、本罪重者依律論。
- 23 凡僧尼等令俗人付其經像歷門教化者、百日苦使、其俗人者依律論。
- 24 凡家人奴婢等若有出家、後犯還俗、及自還俗者、竝追歸舊主、各依本色、其私度人縱有經業、不在此限。
- 25 凡僧尼有犯百日苦使、經三度、改配外國寺、仍不得配入畿内。
- 26 凡齋會不得以奴婢牛馬及兵器充布施、其僧尼不得輒受。
- 27 凡僧尼不得焚身捨身、若違及所由者、竝依律科罪。

註二 『過海大師東征伝』はこのように二四人とあるが、『続日本紀』(卷二)は「唐僧鑒真、法進等八人随而帰朝」と伝えた後、天平宝字七年五月六日(続日本紀卷二四)、鑒真物化したことを伝えたなかに「遂与弟子廿四人。寄乗副使大伴宿祢麻呂船帰朝」と記している。蓋し後段の記は、『続日本紀』編纂に当たり、さきの東征伝に依る追記であろう。